



## できごと

子ども図書研究室講座を土曜コース(12/2と1/13)と平日コース(12/6と1/17)で実施しました。「作ってみよう手袋人形 演じてみよう手遊び・わらべ歌」と題し、常葉学園短期大学非常勤講師であり、さまざまな場所でおはなしかいなどをされている久保節子氏を講師に迎えました。

この講座は講義だけでなく、手袋人形の制作と演じ方や、手遊び・わらべ歌の実習にも多くの時間をとりました。受講生はみな、熱心に取り組み、講師からのアドバイスも真剣に聞いていました。講師は、演じる際基本となることは「聞き手を大切にすること」と述べられました。(裏面にて、概要を紹介します。)

## 子ども図書研究室のテーマ展示 ただいま展示中です!

「桜の本」  
「ニッサン童話と絵本のグランプリ」受賞作品  
新着図書も常時展示中です。

## イベント情報

### 大空を見上げたら - 太陽・月・星の本

古代から現代まで人間に身近な存在であった太陽、月、星にまつわる伝承、文学から最新科学に至るまで、国際子ども図書館が所蔵する資料を中心に、多角的な視点で各種の資料約300点を展示します。

主催：国立国会図書館国際子ども図書館  
開催期間：2007年2月10日(土)～9月9日(日)  
休館日：月曜日、国民の祝日・休日(5月5日を除く) 資料整理休館日  
開館時間：9:30～17:00  
会場：東京都台東区上野公園 12-49  
国際子ども図書館3階 本のミュージアム

## 新着資料から

### 絵本

『ポッチャーン!』



フィリップ・コランタン / 作  
ふしみ みさを / 訳  
朔北社  
2006年10月

むかし、おなかをすかせたオオカミが井戸の底においしいそうなチーズを見つけたが、もう少しで手が届くとき井戸に落ちてしまう。井戸の底にチーズはないし、ずぶぬれでくやしがるオオカミは通りかかったブタをチーズで騙し、ブタはウサギをにんじんで騙し、井戸の中は次々と騙された動物が落ちて入れ替わっていく。

さて、最後に井戸に落ちたのは誰? チーズの正体は? 縦長にめくる形態で、空や井戸の深さが効果的に表現され、見返しや裏表紙までていねいに描かれている。【幼児以上】(宮崎)

### 物語

『時間のない国で』 上, 下



ケイト・トンプソン / 著  
渡辺 庸子 / 訳  
ポール・ヘス / 装画  
東京創元社  
2006年11月

舞台は現代のアイランド。伝統音楽に親しんで育った15歳の少年「J」・リディやその家族、町の人々は、最近時間が足りなくなったと感じている。母親から誕生日のプレゼントに時間がほしいと言われた「J」は、時間を捜すうちに、地下壕の壁を抜けて偶然行き着いた「時間のない国」で、冒険に巻き込まれる。

各章に置かれた伝統音楽の楽譜やケルト神話、登場人物の持つ物語が軽やかに絡み合い、大団円を迎える。ケルト神話に関する知識がなくても充分楽しめる。【中学生から】(鈴木)

## 子ども図書研究室講座 報告

1 回目は、「おもちゃをやって」の手遊びを全員で行った後、受講生の簡単な自己紹介をし、和やかな雰囲気ではじめた。

講師が行うおはなしのプログラムは「(1)手遊び(2)手袋人形(3)ミニパネル(詩など)(4)指を使ったおはなし(5)小さいおはなし(6)おはなし(昔話)(7)パネルシアター」の形を基本としている。最初に行う手遊びは子どもの心を開く役割があり、手を動かすだけでなく、コミュニケーションの意味もある。最後にパネルシアターを行うのは、「(6)おはなし」についてこられなかった子どもも「今日は楽しかった」と思っているからである。小学校高学年や中学ではパネルシアターの代わりに「言葉遊び」や「なぞなぞ」を行う、と述べた。

2 回目は、受講生が、手遊び・わらべ歌を1つと自分が制作した手袋人形を使って実演し、講師より以下のようなアドバイスを受けた。



演じるときは「聞き手にとってどうか」を考える。手袋人形(手遊びのときは手や指)に集中してもらうために、「聞き手のじゃまになるものは外す。服は無地が良い。背景にも注意する。演じ手の顔と重ならない。」などである。

手袋人形のくまを使った「くまさんのおでかけ」では、「聞き手に見え、かつ前に進んでいくようくまの顔を進行方向斜めに向ける。腕を常に水平に保つ。くまが歩くとき、体をひねる動きがあるとよいが、動きすぎると見ている側が目で見えなくなる。また、腕から沈み過ぎないこと。行きと

帰りに同じ動作をすると子どもが安心する。石などの位置をだいたい決めておく必要がある。」



手遊びでは「舞台は胸の前。子どもの想像の世界であるので手や指だけで行ったほうがよい。子どもが楽しめるよう導入や流れを工夫する。」などである。例えば「さかなをやって」では、上に向けた手のひらが網であることを説明し、最初はゆっくり行う。ある程度あわせられるようになったら、子どもに魚の名前を言ってもらい、コミュニケーションも楽しみながら、魚を焼く。大きい魚から小さい魚へ移って終わると子どもの気持ちを落ち着かせることができる。

**講**評の最後に、多少の緊張は大切で、慣れずぎることはよくない、語り方は録音などのお手本を無理にまねるのでなく、それぞれの個性があつてよいと述べた。また、毎日新聞(2006年12月8日夕刊)に掲載された鴨下氏の『朗読：基礎の基礎』の「朗読を聞く相手がいることを忘れない 人様の作品を朗読するという謙虚な気持ちを忘れない。そうすると 作品を正しく解釈して、きちんと伝えたいという気持ちが生まれる。」「自分を見せようとする穴に落ちる。きちんと作品を解釈していれば自然に表現力はついてくる。」から、手袋人形を使ったおはなしも同様であり、聞き手を一番に考え、作品や作者に対する謙虚な気持ちを忘れてはいけない、とまとめた。

### 所蔵資料から

研究書

『手ぶくろ人形の部屋



作ってあそぶ・作って演じる』

高田 千鶴子 / 著

偕成社

1994年4月

カラ・軍手などを使って作る手ぶくろ人形の作り方や演じ方が、写真つきで詳しく説明されている。今回の講座で使った「くま」や「ぶた」の他に、歌にあわせて演じるものや複数の人形を使う人形劇なども掲載されている。1982年4月の改訂。

(殿岡)

\*表紙画像はすべて出版社の許可を得て掲載しています。